

青い涙と星の湖

出会い

小さな林の中に、泣き虫なキュリアは住んでいました。

日に何度か目に涙を浮かべ、

週に何度か一滴の涙をこぼし、

月に何度かはらはらと涙を流し、

年に何度か声を上げて泣くのです。

林を抜けた向こう側には何があるのかしら……？

キュリアはそれが知りたくてしかたありませんでした。

ある日、どうしても我慢ができなくなったキュリアは、恐る恐る林の向こう側に行ってみました。

そこには緑の草が生い茂り、どこからかコブコブ、トクントクン……と不思議な音が聞こえてきました。

——あれは何の音？

キュリアは音のする方へそうっと進んでいきました。

するとそこにはみたこともない大きな水たまりがあったのです。

「君は誰？」

急に話しかけられたキュリアは心臓が止まりそうでした。

「君は誰？どこから来たの？」

そう聞かれても、キュリアは息をするのが精一杯で、動くこともできませんでした。

「大丈夫、何もしないよ。怖くないからこっちを向いて」

その声がとてもやさしかったので、ほんの少しだけ体が動くようになりました。

そして目に涙をいっぱい溜めて、ゆっくり、そうっと振り返りました。

「ぼくはミルル。その湖に住んでいるんだ。君は？」

「……わ、わたしはキュリア。向うの林に住んでいるの。」

キュリアは小さな小さな声でそう答えながら、涙を一滴こぼしました。

なぜならとても怖かったからです。

だって誰かと話をするなんて初めてのことでしたから……。

するとお日様の隙間から糸のように細い雨がほんの少しだけ落ちてきました。

「そうか、そうだったのか、君だったんだ……！」

ミルルは一人頷くのでした。

キュリアはわけがわからず、今にも涙がこぼれそうな目でミルルをこわごわ見つめていました。

「ほら、見てごらん。広くて青くてきれいでしょ？僕の大好きな湖だよ」

ミルルが指差す方を見ると、さっきは気づきませんでした、その大きな水たまりは空がそのまま溶け込んでしまったように、青くてとてもきれいでした。

「この大きな水たまり、湖っていうの？すごくきれい……」

キュリアの涙はいつの間にか消えていました。

「君の目と同じ色だよ？ここは君の涙でできているんだ。さっきね、それがわかったんだよ。ありがとう。それから、会えてとっても嬉しいよ！」

ミルルは本当に嬉しそうな顔でそう言いました。

キュリアは今まで感じたことのない、なんだかとても温かい気持ちになりました。

そしてさっきまでのこわい気持ちが、ふっとどこかに飛んでいきました。

「あの、またここに来てもいい？」

「もちろん！いつでも好きなときに来るといいよ。ぼくはいつでもここにいるから」

「ありがとう。でもわたし、今日はもう戻らなきゃ」

キュリアは寂しそうにそう言うと、また一滴涙をこぼして帰っていきました。

——キュリア

その時ミルルはなぜかとても不安な気持ちになっていました。

思い

次の日も、その次の日も、そのまた次の日も、キュリアはミルルの湖にやってきました。はじめは怖がっていたキュリアですが、今ではすっかりミルルに打ち解けて、二人はずっと前からの仲良しのようになっていました。

二人でいると何をしても楽しくて、散歩をしたり、おしゃべりをしたりして過ごしました。そして泣き虫のキュリアは、微笑んでいることが多くなったのです。ミルルはそんなキュリアの笑顔を見るのが大好きでした。

ある朝、ミルルは思いました。

——なんだかいつもと違う

それがなんなのか、そのときのミルルにはわかりませんでした。

その日もキュリアがやってきました。

「ミルル？どうしたの？」

キュリアはミルルの顔を見るなりそう聞きました。

「どうもしないよ？どうしてそんなこと聞くの？」

「ううん。なんだかミルルが遠くに行ってしまうような気がしたの……」

そういうと、キュリアは涙をこぼしました。そして空からは静かに雨が降ってきたのです。雨が降るのはとても久しぶりのことでした。

——キュリアの悲しい顔なんて見たくない

「遠くになんて行かないよ。ぼくはずっとここにいるから。何があってもずっとね」

ミルルはそう言うと、空を見上げました。そしてふうーっと大きな息をつきました。

——あっ

気持ちのいい風がふく夕方、キュリアが林に帰っていったあと、ミルルはやっとそれに気がついたのです。

大切な湖、それはミルルそのものでもありました。

あんなに大きくて、あんなに青くて、あんなにきれいだったのに、今ではすっかり小さくなって空の色もどこかに流れていってしまっていました。

ミルルはようやく、いろんなことがわかってきました。

風が通り抜けていくような気がするのも。

お日様の温かさに溶け込んでしまいそうな気がするのも。

月の光に吸い込まれてしまいそうな気がするのも。

ふわふわ浮かんでいるような気がするのも。

——笑っていて

ミルルはほんの少しだけ怖いと思いました。

でもそれは本当に一瞬だけのことでした。

何が起ころうとも、ミルルの心が変わることはないのです。

——笑っていて

笑顔で手を振りながら帰っていったキュリアの姿が目に浮かびました。

キュリアはきっと明日もやってくるでしょう。

また明日も会えるんだ、そう思いながらミルルは目を閉じました。

そんなミルルに星の欠片がいくつもふりそそいでいました。

まるでミルルがお星様になってしまったかのように……。

別れ

「ミルル、おはよう」

翌朝キュリアがいつものようにやってきました。

「おはよう」

そういいながら微笑むミルルは、なぜかとてもきらきらしていました。

「ミルル？ どうしたの？」

そういいながらキュリアはあることに気づきました。

——あ、ないっ……ミルルの大事な湖がないっ

そしてそれがどういうことなのか、なぜそうなったのか、キュリアにもわかりました。

「キュリア、ぼくはもういかなきゃいけないみたい。ぼくはキュリアの笑っている顔が大好きだったんだ。だからキュリアにはいつも笑顔でいてほしいんだ」

「でも、でも湖が……」

「そんなこといいんだよ。キュリアが笑っているなら、そんなこと……」

その時サラサラと風がふいてきました。

「あ、ミルル！！」

ミルルは風に包まれながら、たくさんの星になっていきました。

きらきら、きらきら……

さらさら、さらさら……

——ずっと一緒にいたかったよ

どこからかミルルの声が聞こえてきました。

「ミルル！！」

キュリアがいくら叫んでも、もうミルルは答えてはくれません。

——ミルルがいたから、だから私は……

静かに雨が降ってきました。

そしてそれはミルルの星の上に、少しずつ降りそそぎました。

雨は止むことなく、いつまでもいつまでもそっと降り続けました。

やがて湖がふたたびあらわれました。

でもそこにはミルルはもちろん、キュリアの姿もありませんでした。

林を抜けると、空の色が溶け込んだような美しい湖がありました。

湖の底には星がきらきら輝いていました。

そのたくさんの星の中に、青く澄んだ美しい石が埋もれていました。

まるで寄り添うように、ひっそりと……。